萬葉集

[illegible]

[illegible]の句を[illegible]
[illegible]は蕉翁の句[illegible]諸[illegible]
[illegible]
三日翁乃句を唱へられ[illegible]
生きへ[illegible]翁の句[illegible]
[illegible]集[illegible]
[illegible]
[illegible]

序

[illegible]門下のゆゑはかなき剃
みて書字乃労をそなへとゝ
安永甲午中秋

紫狐菴蕪村誌

芭蕉翁付合集巻之上

平安　紫狐菴蕪村　選

[illegible]破て蝶をやる弄
反守っ初もうつはる鉢ちゝ
[illegible]肩を居をそめく　蕉

はつ[illegible]人の姑をめしつれて
絲勤の[illegible]打りひらつ
汚[illegible]の清ハ隨[illegible]の中　蕉

親や碁をうつ夏のつまゝ
餘[illegible]の廣葉を手合せ
贄よ買ふ〳〵秋乃ちらゝい　蕉

二月の蓮菜人もすきめしや
婦結牛乃逢る日の新
胸ちらぬ紙の緒をあつるて　蕉

内外の下句ちりなちら
読よゝ討よの使いゝめしに
一秋乃智ゝ鈴ゝうつゝ半ゝ　蕉

雪を打樫やさゝよ霧ふく
紅のゝ[illegible]ゝ色ゝ日も白ゝあゝ
ちつゝてゝ温泉の碓氷月をつ　蕉

藤琴ゝ明の風雅を忘ゝる
涙おつゝ牡丹散つゝ
耳うゝ蛙ゝ[illegible]ゝ時鳥　蕉

京の月[illegible]ゝ躍らん
扣ゝ[illegible]ゝのやむ人の物[illegible]
眉ゝく神乃[illegible]ふゝ　蕉

ひとり賣る雪孤山道
寂さや苔やゝ捨て破る細
何ゝなくて居やう如浦　等

日のちらくゝ世ふ米を刈
高い濤ゝ者うたあるうて
鍛ちやに石を三の数多の沼　等

俤法つゝや乳を三ゆうすて
さゝん如ゝうちふまゝゝあく
新法の喚ゝくゝ大を燒て　等

二

隣さうゝ乳町ゝ乳ゝ
二の尼ゝ迫濤の花の蜜ゝ
蟷ゝむゝゝゝゝゝゝ臭ゝむ　等

蜜物ゝ麗遠乳物ゝ乳
いまて帖の男をゝつゝ
盜人の記念乃松詩吟れて　等

烏賊ゝちゝの國乃ゝゝ
ゝゝ乳さの徳ゝもとゝ時ゝ
秋水一斗りつゝを秋て　等

日本の書白、この頃手月ばかりて
市より本樫をとりて琴琵琶弁
うし張りつかせる物の名なり　寄

初雪張りつる袴をうつ紙
雪よりもまさる羽の合
世の業にまつ物のねおれて　寄

奥のきさらぎを思ふあさく
床ふまりて語きいらとあり男
張さゆりけりの恨みのこりし　寄

に御しと腐をとりてちりなさ
明日は歌よ首送りせん
小三さよ盃さしてひとつうしひ　寄

うふらいくさ其さくりゆさ
指箱手鏡をゆり移やちのうあり
雪紀を紙炬りて　寄

篠ふくく指い柿の帯へさひ
三絃くんん石彼の図人
恋さくく美法て打る碁を寄　寄

[illegible]

月よ[illegible]て[illegible]唐物の[illegible]

[illegible]　臨海を[illegible]　翁

秋蛍乃虚(カラ)よ[illegible]

爰の実て[illegible]

[illegible]　翁

[illegible]

盍朶の[illegible]を[illegible]

水の浮門を[illegible]の春　翁

[illegible]

[illegible]

燈[illegible]

[illegible]　翁

令婦の君[illegible]

[illegible]

佛[illegible]奥　解[illegible]　翁

縣[illegible]

五形(ケナ)　菫の畠　古　文

[illegible]　翁

暮日をさしもくり刀賣る年
雪はれぬ岩の面乃笠めつらしく
襟を雄々片袖をとく　翁

あるくと樽戒檀を吉ちさん
芭蕉の名をとられ禅
三ヶ月の岳に鳴く蛙乃声　翁

おもしろう仏を齊の芋川
ふられ面書まゐの花のうけを入
その年を我をおれく　翁

五月

花蘇馬貫の素を咲こつを
鶯ふるまゐの月うすつく
風吹ぬ秋乃日籠を須ゐさ日　翁

うれいをちを誠ゐこ茶（マルカホ）
捨られてくれゐ雲北離き乎
火をうぬ火焼ゐ人をそん　翁

書ありて却々の徒ちをく
多沽納を半くあくし
花よ注樹の鑑とをてよゐれ　翁

なりぬるもの七夕のつま
西南は桂のそれ乃つちむと花
棠のわれとおうつ音　翁

そやそを書て梅ゑかきる西月平
てみもゆる矣芙乃宮
寅の日弦旦を飛沼の高新て　翁

沼ゑ乃ゆ清とさ芹の根
粥すきるけうを花ゑかとゆう
物ゑのトみ濁み事丸　翁

ワキ

秉月や鶴（カウ）の行（ツク）くなりひかて
夕の新日乃ゆられあるそう　翁

音もあるそ異足ゑ月のうすくと
砂るる臺芋葉切平いて
秋の須旅の乃連ゑいるうゑ　翁

庭ゑ未苔作るしひの落衣
夜深るそ山樓ゑ平さるえん
麻ゑうるゆの集ゑ　翁

旅衣笛よ蔦花を打拂
籠輿もまだ未だのあけぬ
骨をとんで坐よ朔くうちうつり　翁

萱屋もまだ蔦よ岩囲つゝ白
芥子のまの小坊交よおむれて
おもたのもたゝる蓮の実　翁

物焚手屋根ふきまる片庇
夏腐つゝて母の喪まへ
先改のまから結も破ぬ　翁

とくゝ列石屋よ髮をちやせんして
拾笠よ宮を屋りを釣雲
五句目　張よ恰かうん月ハ海　翁

ワキ　薩摩の寄ようゝ月　翁
江戸樣名物ようん紫時雨

貝ひろゝ磯馴て
破ちゝ人の肩手をつく
五句目　そのの袋のして西方や祖父う義　翁

湊入帆のうゆ高砂城
世の中を西よ近きうの菓乃煙
時うかゝらの香やさゝき　翁

かゝみてゝの袋のきれのちつゝよ
夢代古くゝ国の朝風
はの国乃新波ゝゝ吹うて　翁

一夢の連ゝお袋むしまを
苗代もゝゝ面ちきうし
警蛙巣のいゝうゝ花よゝ遠て　翁

四月

西日のてゝふゝてゝ氣ちう
旅人の乱かゝ切裏書て
ゝゝゝゝ雪うぬを乃乃　鞘（ヒキハタ）　翁

月待て俳の内裏よ司　石
鞠白つゝゝ松のゝゝやつゝ
鞠ゝゝゝ三笠弱ゝ秋の末て　翁

名ハゝゝよゝ俗ゝゝ
入四つよ結汐の蒲湯乃夕ゝ書
中ゝゝゝ脊の尖（メカ）を山伏　翁

[illegible]

[illegible]

月[illegible]の[illegible]の[illegible]

秋風の[illegible]をちらす波の音

[illegible]方や白[illegible] 松坂 翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]一身四

順[illegible]の道のうけ[illegible]

行[illegible]の[illegible]の[illegible] 翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]

羅[illegible]

[illegible] 翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]

酒[illegible]

改[illegible]の[illegible]をのそく[illegible] 翁

[illegible]の[illegible]の[illegible]

中[illegible]

[illegible] 翁

[illegible]躍の形を変
月[illegible]手に流る身
花[illegible]の中に流れ[illegible]て　翁

嵯峨方なる草庵の露
一貫乃銭もつゝと五[illegible]
醫者の業に[illegible]別　翁

ワキ

いろ〳〵の名もむつかしや花の[illegible]
[illegible]れて悔に変いさめぬる　翁

波松かゝる破[illegible]む帆莚
月[illegible]て冥[illegible]をかゝん酒[illegible]て
四白目　民の竈[illegible]の烟る[illegible]　翁

[illegible]て[illegible]場よやつ[illegible]色拍
つゝれの玉[illegible]振の義の毛
[illegible]面[illegible]の[illegible]の[illegible]　翁

[illegible]を[illegible]けよ白髮[illegible]て
[illegible]の道も[illegible]て切せ[illegible]
[illegible]武限の[illegible]　翁

草枕おうしたゝ花ゝ佐賀山て
ちゝ玉ゝ弥生の初るかなと
お供して高ゝ登ゝ思ゝ出ん　等

山世の末ゝ見ゝ渡ゝ入
朝つゝゝ書寺の陰の夢
けゝる今と鳴乃ゝ今　等

かゝけゝる花ゝ変なと菜萸却て
孫の姫乃ゝ病ゝの身
ゐゝゝハ木魂よゝく書の風　等

剉かゝけつゝ門ゝ来ゝる笹ゝ伏ゝ
棺をおゝもゝ塚の花芝
神書いゝゝふゝ岩を粧ゝん　等

ゝゝゝゝゝ衣を逢ゝゝゝおく
明日志めむ丁を借て生て
月さゝ清ゝ陳中の市　等

乃輿い志菖ゝ手かゝゝ入
小袖待をおゝく戒乃師
我ゝんの母よ仰ゝる母ゝて　等

貪よいなく如 高いとれる

ふるの京おもかげ〳〵 書る古今集

花よ茅 切る坊の酒 蕉 蕉

鶯の巣をとるもの羽根きひ

蚕 稚 動 ちて 幕 ふる

錦 赤を 織りて 古 高 高 ん 蕉

ちらきいふてとれるもり

片 隅 よ 出 歯 うつて 芋 乃 月

二階の客 弦 書れる 秋 蕉

ちらちや 新 鶏の 鳴いてる せ

稲の 葉 処 ちらかる 風

餞 石の 初 年 ゆる 終 庵 己 蕉

鶯の 根を 刷 ぬ ちり

一ふる 風 の 木乃 葉 ちる ちる 蕉

ワキ

股 川の 新 うぬ 川 絞 て

猩 を 赤 ぬ 篠 弦 の 弓

五句目 中 ゆ ふ よ 芋 遠 う る 霄 乃 月 蕉

[illegible]

行くも帰るも言の問へば[illegible]

星[illegible]と知て年の見ふく　義

[illegible]去年れ稲[illegible]

芙蓉の花乃[illegible]

吸物にまつてくれしまいせん　義

炒春も盧同ら男居なくて

さし来つる月の[illegible]

苦[illegible]手[illegible]待

義

雪けさの[illegible]の小[illegible]

[illegible]

時鳥[illegible]　仕[illegible]　義

疲労の中[illegible]力なき

[illegible]をかつて車引[illegible]

[illegible]人を相[illegible]

義

黒[illegible]切[illegible]

青天[illegible]月の[illegible]

湖水の秋乃[illegible]良[illegible]和[illegible]

義

紫の戸や菅麦ぬをかれて家をとも
布子着雪の降の夕くれ
押合て森てゝ又雪つゝみつゝら　翁

市中ハ物のみやひや文乃月
ワキ　ちつ〳〵と門〳〵の雪　翁

二畳中ちゝも果ゝて稿よ出て
庶うゝ雪〳〵うゝめ一枚
五句目　山鳥を鉢をゝ出て不自由さ　翁

只そのやう〳〵出て掘指
草村よ誘ゝ出ゝ夕雪
蕗の芽ゝ初焼やうゝ　翁

庵のたゝうハ花の咲ゝむ時
鶯の七尾乃ゝ伝ゝ
奥の背ゝうゝの老をゝて　翁

汚人入し小門乃淀
立〳〵ゝ屏風を倒ゝ女ゝ
湯屋ゝ竹の簀子伝し　翁

菌香の実を吹落す夕嵐
信濃国善光寺に帰り侍りける
さら川の猿と世を経る秋乃月　翁

年よ一度の地ゐたりし
おち葉は本に帰るなり　潤
足袋ぬぎ捨て思ひとの石　翁

追ひて　ゆ
てつちゃの茶ふ水こぼしつゝ
戸漬よもむしろかこひの賣屋敷　翁

てん志やうの月の光つく
うゝと草鞋を作る月夜さし
蚤をふるひ部屋　和秋　翁

そのかゝんらひ蔦のかゝめは搖
ちりて蓋の行ゑ也
草菴よ碧居てい行ゑ　翁

今うき世しに撰集の沙汰
さやゝ品かゝたる為として
浮世の果い皆小所なり　翁

何れを踏てまこと波くこそ
ひなかなれい庭を板敷
まのあるまよ 風遠ちる花の陰 翁

庭汁桶の雫やそうちかをを
ひかりて霄霖ちる秋 翁

五月目 新米なるしたる月新よ
るくてらん 十の盃
ま抜をうまるまして 翁

抜うち出る麁毛くあ米きて
雨の色うちの乃至常迎迷
量 ねつる書簪の多乃ちあとさよ 翁

有てやしあの雪籠うさう歌
足をとよ菜稚い郭て芥の花
菜を蒔て迴る汚濁の学察 翁

山けうや徘徊さしの四妖の点
現法をうらやせこうれし
蕨の面窠のうまあるあるやん 翁

墨なる和尚を支を秋乃菴

高みを水を打る名を掛

山鳥のとうるくしたいちりうあり　義

焦を雲を一いきくを焼

人を高を高れる

染まるかくした傘　義

松葉を迎ひ沢うへ沢山を

そくさるを下くをを

老るるいの蓋をを外かとる　義

出かる蕨のおよ掛ふ部く

りんくとを時雨を者ら

搭婆のけてをを又まる　義

弓雲のね織ぬうを仮ゆくく

ちつを教乃分嘗を

高をゆるるを問乃網を　義

四日の月も紅を紅

秋来ても畑の古乃刈られて

雲雀のね乃をを乃掛ふ夢　義

正月の末より能治の人庭
清水を信を持て分ケ与
豊の酒藤て酒破の切つきて　翁

やんやとて釣の顔を笑ひ
結搦を着を汁に切入まて
こせこせ国の奥に来ハひら也　翁

紫雲乃雲もうつまちと落て
國〻来る人よりの
常〻〻一句搦て供支度　翁

摩耶〻高松の雲乃ふれる
夕飯よりて吟へハ風蕭〻
蛭乃口雲をうきて家時ふれ　翁

ものおりひそ高きて休ん
遠せを屋ふりのみ
金沙と人〻ふるふ身の風さき　翁

町内の秋る更切の風し支
行をふ〻みを屋ふうく
花とふる多ハ西念の衣着て　翁

栄さん京のものをかゝげる
多賀空誠あれよ成る北たろ
旅の地をよそ吟しおく　翁

すさまじ女の智恵なくて
何おそろしい草に指乃なく
夕月蕎麦の萱ゝ乃廃ちる　翁

又も大幸の鮭をそなへ
堤ゝ田乃書やそていされそ
かゝの社を繕ゝやろなる　翁

妻くゝ子雑子の吟しろ
家夢情を表詩を遣ようけて
上のたろうよそ米乃を　翁

五白目　霄の内そゝせ月の雪

武国の武仏を名ける絵うせ
京よ汲ゝ碓井乃水
玉川や れの〳〵六の不えて　翁

芭蕉翁付合集巻之上終

芭蕉翁付合集巻之下

紫狐菴蕪村選

義誠に[illegible]を秋乃淋しき

[illegible]

始をかしく人みなうせぬ　翁

京を通ひおりはべる細基よ

さらさらの[illegible]ぬ六月　翁

頃年味噌をみやこ白石

[illegible]おんお貸乃[illegible]　翁

[illegible]雪尾の村雨を押へけり

[illegible]半[illegible]名月　翁

神丁より金子を出して表うくまれて
初年の女房孫新子振舞て 翁
又山まをすまの 宰 人
法京の酒肴を送る花盃を 翁
おりてをりて青美北の果
ヒの赤も赤の方平宮を吟ケ
奥より吟 何くをまれ雑れ れ 翁
子多吟一 一歌く平宮のなり
来迎の多れをまれ美 用 翁
隣へを初せん嫁を迎きてを
房風の法よみゆるを盃 翁

神丁より金子を出して表うくまれて
歌をおしよ居合ひぬを 翁
町京乃つらと酔て花の法
門を押こ壬生の念佛 翁
東風乃世の叢乃いをれを吹よは 丶
岩くみるまれ脱りれらの
江戸の左右向ひの亭を登られて 翁
うちみるいまとうの印を借を
方くより十歌の田乃法の音 翁
桐の木をくり月さるなり
門志みて岩まつくわる面白さ 翁

空豆の花咲ふる刈麦乃畑

ワキ　屋の子鶏乃ちゝ鳴川　公春

上弦を通さぬわたる雨降て

ちゝと那よまれ酒の宮中

五月目　病　変る雅を寝て夏乃月　公春

咲の仕ぶれ工夫さまなる

嬉をちん度こゝろ乃ゝ

信都一のもゝへ先参をさる　公春

風細う蛍の鳥の啼ることを

京の流まこと涼ゝ秋ゝ

鄙汁ひうひ者ちらくなりて　公春

枯一抑と今ふおーみて

雲の絵吹ちゝ　勝月

ふちん夏てゝのおもひ　公春

不屋ふ漢を中ゝ

ちゝ坊をとへうん

云ゝ雅ひちゝふ来洗ちふよ　公春

客を送りて提る燈籠
今の間に雪乃厚さを指てゝ
年貢をまんとほめられよゝ　翁

息災と祖父のまゝの孫めてゝきよ
塩忌あるゝぬ七夕の鳴て
名月のちよ合せゝ芋ゝけ　翁

横雲と ゝゝ風乃吹出て
咽のと ゝ雲雀 物ゝ
[illegible] 速 て　翁

片ゝけ山と月球てる哉
好物の餅を絶さぬ秋乃風
剃木の安を小弦 寒　翁

細の者をつき 安と声うけて
星ゝゝゝ二十八日
ひゝゝさい はゝ軍の大ゝ　翁

肩癖ゝゝる湯屋の音茶
とをゝの干菜刻もうゝの室
馬と知ぬ日を内て 逸ゝゝ　翁

紹鷗の七ツを音はきて
塚ヨ門ウ五十石ヲ
山嶋の鉢鬼もを指月と花　義

吟ぜられ金ヲ
川城の常し社ヲ
平地の寺乃うすを義　昭　義

丁抱をはなれの方へ
捨ちん鶴の巴ちくなう
夢用ヨ浮世を京すまるね　義

七夕の如山伏乃移さた
中ちて俳歌一会のかうそし
智を半紙て森せ如月　義

風やて秋乃弱れ庵さうを
鯉の吟ヨの縁を動ウ中れ
ちちはと米の揚場社乃庵を　義

雪の松ヲ生ヒみれを高ちし
日社ヲちち中くの赤こを空
下ケ者を一舟浮ヨ寸明て　義

苗の京を毎よなけも
朝風よ命合ねを吹出て
遠よめうくくとそる生そめ　翁

さそ鶴よ喰籠きりあ宵の秋
岩て後る稼ぎの音
耕作のきをくくしく神前　翁

豆腐ひらをあ信濃道
庭麦の緑　ふくくも麦踏
雨の後りを半ばくり　翁

炮烙のきちよくくむ縄の足
藺を刈ひをて門ふくく
切麦てひらくくはをひ　翁

お旅の宮法あさ百月
うてをくく言葉の行よ法ひけ
神ようあくく前髪乃麦　翁

ワキ

ひをくくて来い海切聖ふあ
詩の形をひくく栗乃稲　翁

菓子屋の店先や夕涼み

ワキ　色迷ひあらさるの花　答

さゝ蟹の歳をいつやつけ太根

ワキ　そさ〻ぎ鶯小京乃煤　答

春風や責付中ひ水の吉

ワキ　うけろいもの花の糸口　答

嘉さゝき旅宿やを苦せり

ワキ　古人うやうの夢のあうし　答

秋乃雲ひ〻えゝ付笠や弘

ワキ　萩ゝ稀ゝ萩ゝ稀ゝろ　答

ふゝへゝてみせゝやゝの田植分

ワキ　笠張ゝむ石破乃又月雨　答

奥庵も有ゝて〻ゝ東乃搗うゝ

ワキ　小菊ゝ首付新ゝうゝのむ　答

時雨てや花ゝ残る檜木笠

ワキ　有なゝ紀蟹とゝもゝる草　答

蓑のうけかさゝの花やつゝしや
折てやをうん庭乃第末

貞三　七夕の八日ハ雨のさびしくて　翁

芙蓉うらうらて屋根葺ふるを
末の葉ら〻梭の末も秋毎月
つゝ〻ぬうぬる蔭のくひこの　翁

石菖もかゝれ出る葉乃角
蓑をくゝりて庭掃ばつしち
火ふりして焼る松のこゝ行者を　翁

切籠れうこうすゝゝ夕芳
さゝ〻の香こうりゝ月の新
人一代の意をうゝ秋　翁

懐ハ狐指さしてやゝ出る
下戸をゝゝ雪ふる歩の亭
ゝ思ふ梅を我分ハ書こゝ　翁

ふみてやゝ松のとりし火
明やゝゝ蓑をまゝゝ後を
何を明り時鳥屋ゝ　翁

蓮の葉に[illegible]
笈掛しまゝ[illegible]急速て
拾りの[illegible]を[illegible]むる　翁

秋立て又一[illegible]
落葉(ウラス)[illegible]僧堂乃月
[illegible]外を[illegible]の[illegible]　翁

[illegible]月[illegible]
う[illegible]を辻井に[illegible]
絹(カセ)買[illegible]　翁

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　翁

貴三

[illegible]
酒[illegible]
[illegible]
[illegible]　翁

瓢單の[illegible]

六白目

風[illegible]
行[illegible]安[illegible]利の比

磬は多くは目くらかれ
ゆくゑの空手をたゝき
獨せゝやく寺は編さま
は望よ古き書の名をはく
延年をうせぬ雨のあけち
をぬぐやいかちくなやふ
ぬひくの声乃美
よもつうた屋の口腹をすくれ
物ひくくされ為なくを
月と花はの方拍を少くて
雲雀鳴くれの肌寒き

破屋戸は紅うち付くる赤の束
くをかさひくを麦の刈さうら
京ゆくて服装ゝはむ十寸鏡
ものおもひある神ゝは物ひ
人去てゆくを座乃匂ひくれ
初鰹手や籠ら堂の片階
問ふ嵐の竹ゝ言中ゝ
垣穂のさけ雪ハくれて
竹やみくる蛍の燈ら多ふこう先
竹乃雲ハ巻ハくなけくもて
月のうれ社堂を清くふ

[illegible]

秋の田をうつせばかすみてさいくるうゝ文字問よまるる　翁

いうゝ[illegible]　[illegible]屁の香茶屋

[illegible]をもるの夜てうかなき　翁

花の影清家をうやすし

田螺を啗て腥き口　翁

坊主かうらの[illegible]

松山の猫に清しの咲うら

[illegible]の岸をうたる川毒　翁

[illegible]小豆粥

[illegible]掛て清しの[illegible]

掛[illegible]の[illegible]清をおせるや　翁

西[illegible]敬のむ[illegible]のかるよ

月の清よ[illegible]千石ハ[illegible]

[illegible]清をさめ[illegible]　翁

踏[illegible]の[illegible]の[illegible]月夜

[illegible]の山乃書遠[illegible]空

[illegible]　翁

吹と云こゝに歌しつゝ
草を枕手枕をして秋の哀
伏見のゝ社古の月　義

玉水の早苗とゝけい懐しや
我が詠こゝを紅敬こゝ集
心伏を切てこゝけこゝ関の方　義

こゝこゝ変化なり
常如て和歌いれよりこゝ
考てこゝめてこゝ道乃大日　義

撥扇を水田を蛍こゝ人の夢
遊片岸こゝ鶯こゝけ
不動こゝ池経新の宿の本陣市　義

伏見こゝ客こゝ名の伏こゝ
絡飛みこゝ
第三　鶴離階こゝの後を伏こゝ来て　義

藁屋　長宋ふ典茅の宮
相国寺社丹の花乃蕚こゝ
榜の蓋こゝ藤こゝ竹の子　義

西行の寺はほゝ草　拙

昔咲て散ける花の踊の笛を吹て　翁

ふるの拾校ちとをつく

京都の桃燈　先師

汐さゝかゝる星川の橋　翁

村へ見田ゆくのまのまたち

塚のうしのり石原

鷹僧の師迎ちふ事の事　翁

又ゝ四国四ゝ記

朝雲ゆきてゝ壺の花

ゝゝもゝかゝる事の形　翁

馬方を待意はほゝき井戸乃堀

月雫を汲ふ操（モミ）ゝ

火ゝゝて破ちてふ子ち達　翁

高沢音ふ幸蔵を乞る

今ゝやる笠ね織を若つれ之

ち行の俳ゝ誰とかくゝく　翁

蔭垣よ赤面[illegible]学[illegible]塚乃也

日いりうゝ野[illegible]二月朔日

初花よ伊勢地乃[illegible]て　翁

いなたよ橋を踏もなうゝ

綠さん六田の柳　塚　桂て

拙菓　寒めく折たゝの汁　翁

みやこをい去年れ乃仰よ思られて

咲よまゝ　親迦堂乃蕾

咲初てゝのゝ猿すへて　翁

ゝつゝの稲のしつゝふ肩ゝ

ゝゝ　ゝゝ門前乃坂

皮剥（カハハキ）の拙　蕎て吟ふ雪の月　翁

苅ゝふやゝ田のゝ乃秋ゝ

蕎かゝ日よ墜ゝ

ゝゝうゝ拙庵ゝ馬のゝうゝて　翁

ゝゝゝ送ゝ我ゝ乃望

さゝ波の門の柳ふ折ゝて

富を吟ゝ蛍ゝ　火鉢　翁

年ゝを重ね桃乃花書ん
勝よのせゝ蛙乃風
宵の月ゝ藤ゝ有る家ゝて　義

名月のゝ雲こうゝしあひ
一戸てゝ紫ゝの切畑　義
和味噌社信濃ゝかゝる秋の風

此者をゝめゝて通る鮎乃雛
青田ゝのゝて夕立の風　義
平めゝる石を数ゝ切ゝ場

まてうかゝこの去年社信軍
糸ゝを人ゝ笠をゆゝしゝ
ゝを朝日ゝ迄乃搭雲　義

蒼みゝる松ゝの咲ゝ
にゝ人通る信州宗ゝ
茅ゝ町のゝる体のけゝこ社　義

象泥をゝけ出て瓜の畳ゝ
壁松ゝ蝉のゝ立る声
安房持ゝの人と此ゝて　義

むこと勇のなることを祈り
日月の星のごとくして流れ
ゆくごとく年ごとに
光立ち昇る姫性の湯やう
ものごとの傍岸中に湧まれて
焼焦しゝ業ゆゑ書りく流さ 翁

ゆゑに猟人も山中に
船遊のけて皆の喰飽き
音冥かゝる神の宮遷し 翁

焼山こへの雲消ゆるより
山部に名もて花の赤陰まて
ゆくるを共冥の卯月 翁

さつりと鶯一年に来て
花岩巣へ毛長持乃上
灯の影ゆくるを甲待 翁

屋目に通ふ翠屏の如く
いとやう松高こと高くうゝ霊
花菖をかくして鶯 翁

一御子者を義経かなをあらため
藤ふじわら名相模の坂
宗長のうそを寸白も薬乃法 義

彩麦ハけさとすゆ野音遠武
ワキ　ゆゑ相模の宝ちうゑ 義
分之　る時のことて淋しを牧の野よ、
ハよろ石の松乃ゝてゑ
方〳〵へ警者をいつる警護
踊の方法法師おかへに 義
盆ゑの法こうゝ寺社普請して、

島ハあをてゑゝとの義
日光へ参んこうゝ方法ハ
〳〵相模乃事 義
夕風ゑ蒲生の家も相生乃 義
相ゑせゑやとさすゝ天目
光のあゝうゝ野山をふゝつゝて
義〳〵かゝふ正谷乃道 義

ワキ
惟ふハ日〳〵ゑゑ〳〵賜の変
数ゑ年を稲のゑゑ貨 義

蓼の穂よりはの音をかなしみて
[illegible]市ふ人の歩うる夕月

五月雨　本乃時音をきくに歩居あり　翁

二階をしらのうすきを裏板
をきをつの葉の下をふきをこて
石丁ものもれ所寺の清　翁

ほそ細工よ雑箸ぬきをかんるろ
ぬくせもをもやけ物小鯛
肌をを清の朝茶のを合て　翁

ほうろうのこ茶をやきて
蓮生よ魚をやめ歩る男ふを　翁
湯のふきてのうめを南茶
丹波うう使もるくて時鳥　翁
[illegible]の茶をと利あけさ茶
雪よりて去茶を退ちう　翁
歩原中二月をくれ
非明のひつうてはをを　翁
ちやうんて寝ろ粉ろ
真の波おろう花を指取を　翁
けさうひろう寝のるく

春の日に産屋の飾りつくるとて
うぐひす山や河鹿啼らん　翁
ふるさとの梢を見ては春ひ
日は長もあらん雲雀なり　翁
かしら挿す櫟林は日うくまて
佛の木化をはむ系として　翁
ゆゑゆゑと白拵出せぬ時　鳥
ちるちるは草のたもとの竹孫　翁
羽二重の糸もてゆはおもし
若叶うゝ神せくまてすゝ　翁
鶏を手まゝ盥ちれしはる月

秋入られの夢氣つこうる
塩演ふるはゝなくる青の月
安住寺のつくらひ　翁

持なゝ法利刀もさらくくこと
ゝ半くゝ京のくゝ紅ゝ
花に寝む一夏まゝ表うへ　翁

小性のゝ　乃ゝ　二　月
竹　搭の内ゝうゝ　氣　完
馬法糞ゝく設ゝつゝし　翁

夕暮ハ洗濯賃をなけ出て
ともかもけろしそれ吊し
桃うりに来まと折かし寿讃　翁

此行らくさ明日ハしられむ
夜椀ひの交に床とる坊子大
百里に生侭あろ乃ましめし　翁

引別し古佐枝未ぬくとおもひ
うけるるは生ぬ中ハ生うく
いふとおと論ぞ今あまさ月乃暮　翁

伊勢乃下向に八ツ下と迄
長持に小草の伸々さいしや
くるりと空の晴る青雲　翁

福寿に一日持たむ沙乃上
擬の角此まてぬ黄宍
濱むしの斗に俵をあるるへ　翁

蘇の菊法名にゑさ波な
むまて来て粟乏枝もむくの声
伴侶ちしろかゝの　ろさ　翁

削　[illegible]長刀坂の[illegible]

[illegible]

引立て[illegible]理よ[illegible]　翁

ひさこ立[illegible]引[illegible]　[illegible]

[illegible]のまさ[illegible]の[illegible]

第三　大根の[illegible]数[illegible]ゆ[illegible]て　翁

猿蓑よ[illegible]れ[illegible]の[illegible]

ワキ　日ろ[illegible]れ[illegible]静な[illegible]　園　翁

[illegible]

[illegible]

おもろる[illegible]の妻　翁

秋風の門の居[illegible]

馬引て振ひ初る月乃新

尾張て什[illegible]えの名ゝ[illegible]　翁

[illegible]の[illegible]

義[illegible]村[illegible]裏通

[illegible]の[illegible]　翁

行そのけ〻て正伏手なれ
笹ほ〻と持て生る棟名
蕨らり〻の和歌末 翁

吾ん人をせぬ酒乃引系
若う〻への小ハ毎へたつくる
紂年文第苗〻月乃雪 翁

揺書れ光て苗れハ筆殺て
聖中詩別を片神を〻 翁

り〻ふとやらて鳴のつつ
拷作手抜て魚生産う〻
障ふりさぬる宿碧の糸 翁

二花三日紅紫る咲
考てられ系乃魚盛
アケ白 百性体も苗代の蛙 翁

肉いそつ〻咲の振翁
そのふこ〻日和〻る月の色
物背れて肌そう〻なる 翁

涙拭もあへぬ袖の露を祖父の借衣
孫うれしさに
服喪ふかくてかなしき旅刀　翁

十里外の金石へ出てて
菴の紫よふ詩堂をおもひ
なつかしみ門乃書付　翁

いつくへう浪ハ波なき湖場を
風のと吹れて京はてまで
ふ明よおくれ船の半てなりて　翁

水うるく他の中にうり通りて
篠井やうるく栄をいとくく
五月　鶉うなうるく やうて 夢の月　翁

通りのなるれてせとつる秋
金さつよひ一茶てきる鶏乃奥
足疼の癖をなとし兼うり　翁

鶏うる書てよつるせるる拙作
中ふうる状の去去右
朝日のりんうるく風振寒き　翁

一宝相鄙う矣て行ぬる
ちらんかあまをの花の拾
山と門をうるを吹乃月　翁

初ちらん品の人乃うけまうり
水海光る演の小鄙
見て通る紀之井い花の咲うう　翁

高坊ひるいとうよいうるを日
うう乃坊又西と成北とあを
家でうう豚を大うひうう　翁

後世の内家ちうを変ふう
嘘晩のさうもむをとせられぬ
大切あ日う二日を菩提　翁

雪うれをしう中乃ちうを
ちう程の糸小掛い皆出あ流
真乃世を巻い近年の作　翁

泊ちうる者の安を月えーて
赤鯨ちをと庭乃正面
定中ちう娘のうをさうれ先　翁

藤江の浦の夕なぎの夢
鳥籠を出でし松の風
大江山の奥千里の笛

米搗きの音ふきとして帰るこ
ゑゝ分て京の中を探合ふ 翁

古き草の義よる古郡也
月影の雲をもちらす雲の色
高砂の浦を踏る砂の足 翁

夕年賀客の夢を借 郡人
金をとゝのふの色分を懐ふ 翁

汐ハ干て砂ハ文去須ケ乃浦
日毎年かゝる歌ひて 翁

七金年とる猶の木乃中
重して寒なゝの月もうら 翁

日家のけしを絵ふ板
ハツふ家るの影ケ乃 翁

さひしさを紛るゝ紙衆落して
甚兎くらし蓍生ちく　翁

枯もそゝみしうき鬘の口惜さ
琵琶つきさく甚語手泣　翁

亀山やはらしの山や此山や
馬上に破てかしこまれつく　翁

宵の雨れきなる山の月晴く
芋堀うえれ小買廉乃角　翁

笠髪て嫁しくを鉄を加りまま
筏うへるゝ小僧蚊蜈　翁
冬の。枯の渡きえ浅く

世の悟をしらく古佐の名をなれ　翁

芭蕉翁付合集巻之下終

安永五丙申歳九月

京都書林

橘屋治兵衛
井筒屋庄兵衛
八文字屋八左衛門
武村嘉兵衛